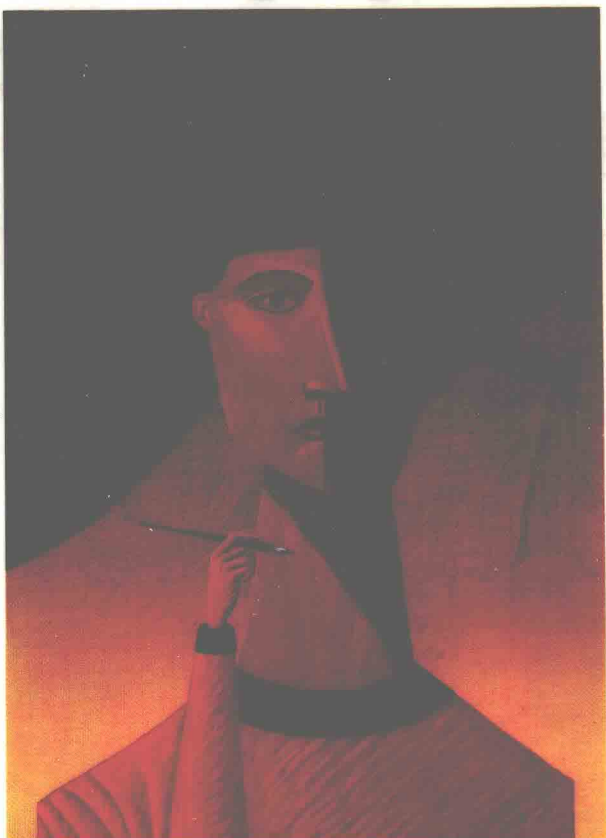


倒錯のロンド

折原一

Ichirō Orihara



の
ロ
ン
ド

折
原
一

倒錯のロンド

定価!! 一四〇〇円(本体一三五九円)

著者!! 折原一

一九八九年七月 十日 第一刷発行

一九八九年八月十五日 第二刷発行

発行者!! 加藤勝久

発行所!! 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号 一一二

電話 (〇三) 九四五―一一一 (大代表)

印刷所!! 株式会社廣済堂

製本所!! 黒柳製本株式会社

© Ichi Orihara 1989 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。

倒錯のロンド——目次

プロローグ	7
第一部 盗作の進行	9
一 盗作の募集	13
二 盗作の誘惑	44
三 盗作の犯行	65
四 盗作の倒錯	84
五 盗作の襲撃	102
六 盗作の執念	113
七 盗作の疑惑	116
第二部 倒錯の進行	123
一 倒錯の発覚	128
二 倒錯の接触	150
三 倒錯の殺意	167

四 倒錯の萌芽	187
五 倒錯の招待	208
六 倒錯の代償	215
七 倒錯の証明	233
第三部 倒錯の盜作	239
一 第一の盜作	242
二 第二の盜作	256
三 第三の盜作	265
四 最後の盜作	276
五 最後の倒錯	279
エピローグ	285
倒錯の日々	288

イラストレーション／北見隆
ブックデザイン／石川勝

倒錯の ロンド

プロローグ 盗作の発見

外では寒風が吹き荒れていた。窓は閉めているにもかかわらず、冷気が戸の隙間からしつこく忍びこんでくる。時折、ガラス窓がガタガタと震えた。

四畳半の狭い部屋。

彼は部屋に戻ってくると、小さな赤外線コタツのスイッチを入れ、手垢てあかがついて汚れたフトンの中に手を差しこんだ。かじかんだ手に感覚が戻るのを待って、彼は買ってきた紙袋の封を乱暴に裂き、中から雑誌を取り出した。

『月刊推理』三月号だった。

この号には、月刊推理新人賞の結果が発表されているのだ。今年はどういうことになっているのか、彼は特に気になっていた。

月刊推理新人賞結果発表！

幻の女 白鳥翔

三十二歳の新鋭、衝撃のデビュー。420枚堂々一挙掲載

目次を開くと、いきなりそれが目に飛びこんできた。予想もしていなかったので、ショックも大きい。彼は震える指先で、目次に示されたページをめくった。

「嘘だ、信じられない。ぼくの『幻の女』が……」

思わず口に出していた。「もしかして、これは盗作じゃないのか」

彼はページをどんどん繰っていった。読み進むうちに、疑惑が確信に変わった。

何度読み返しても、「山本安雄」とあるべきところが「白鳥翔」になっている。エピソードに達した時、彼は再び最初に戻って、「受賞のことば」を読んだ。

「初めての応募で受賞できるとは思っていませんでした。……受賞作が『幻の女』に決まったと、編集部から電話を受けた時の天にも昇る心地は、一生忘れないと思います。……ほんとうにありがとうございました」

受賞した時の決まり文句だ。

胸から上の写真もついている。白鳥翔が彼に笑いかけていた。……

第一部 盗作の進行

〔第20回 月刊推理新人賞〕

募集開始！

本賞は推理作家の登竜門として、わが国で一番古く伝統があり、これまで有能な作家を輩出してきました。第19回に引きつづき、新たに第20回の原稿を募集開始します。推理界に新風を送る力作をお待ちしています。

〔応募規定〕

□種類と枚数／広い意味の推理小説で、自作未発表のもの。四百字詰め原稿用紙で三百五十～五百五十枚（超過した場合は失格）。

□原稿のとじ方／全体を三冊にわけて、それぞれの右肩をとじる。

□氏名等の明記／別紙に住所、氏名（筆名）、生年月日、学歴、職業を明記する。

□原稿締切／八月末日（当日消印有効）。

□発表／三月号（一月発売）の「月刊推理」誌上。

□賞／記念トロフィーおよび賞金一千万円。

ならびに月刊推理社から出版する入選作の印税全額。

□諸権利その他／当選作の上映、上演、放送などの権利はすべて作者に属する。

□応募原稿／応募原稿は返却しません。応募後のお問い合わせには応じられません。

なお、二重投稿はご遠慮ください。

主催／月刊推理社

一 盗作の募集〔山本安雄の手記〕

四月一日

桜の花もほころびかけ、ようやく春めいた気候になってきた。ぼくは「月刊推理」を閉じると、大きく溜息をつき、窓の外を眺めた。

あと五ヵ月、そう、あと五ヵ月なのだ。月刊推理新人賞の締切まで五ヵ月と迫っていた。今、ぼくは東京の場末のボロアパートの二階の薄汚れた狭い四畳半の部屋で、折りたたみ式の小さなテーブルの前に座っている。机の上には、先をよく尖らせた鉛筆が数本と、封を切ったばかりの消しゴムが置かれ、五百枚の原稿用紙がきちんと積んであった。

ぼくが推理小説作家を志してから早くも五年になる。二流の私立大学を卒業して、従業員数わずか八名の零細出版社に勤めたが、不規則で過酷な労働条件に嫌気がさして五年で退社した。その後はアルバイトをしながら、何とか食いつないでいる。月刊推理新人賞の受賞という大目標があり、それが常にぼくの心の支えになっていたからだ。

小説のタイトルだけは、すでに決まっている。

『幻の女』。いい名前だろう。ウイリアム・アイリッシュに同名の有名なサスペンス小説があるが、ぼくも当然この古典的作品を意識している。大都会に生きる男女の孤独を謳い上げ、そこに犯罪をからませるのが、ぼくの意図するところなのだ。

会社をやめた年、ぼくは『幻の女』というタイトルの四百五十枚のサスペンス小説を一気に書き上げ、月刊推理新人賞に応募した。ペンネームは本名の山本安雄にした。

新宿の場末のバー街を舞台にして、殺人犯人に間違われた男の愛と、真犯人追求行を主題にした作品だった。自分としては、なかなかの出来だと思ったのだが、結果は散々で、一次予選さえも通過しなかった。後で自分なりに反省してみると、処女作としての力みがあつたのと、アイリッシュの作品に似すぎたのがいけなかったのではないかと思う。タイトル名が同じで、しかもテーマも近いということであれば、選考委員としても、多くの作品を選ぶことにためらいを覚えるはずだ。それに文章がまだ未熟だったこともマイナス材料になったにちがいない。

ぼくはそう解釈して、謙虚にその結果を受け止めた。ぼくは若いし、まだ先は長い。チャンスはこれからもたくさんある。その間に文章を鍛練して、後日に備えようと思ったのだ。

そして、この五年間、推理小説の傑作とされる東西の作品をたくさん読み、文体やプロットの研究を重ねた。つらい日々だったが、実力は大幅ついたと信じている。

そうした研鑽と並行して、ぼくは過去二十年の『月刊推理新人賞』の受賞作を買ってきて、賞の傾向をみっちり練った。何が何でも、賞の性格に合わせた作品を書けばいいものではないが、ある程度は傾向にそつたものを書いたほうが有利に決まっている。選考委員の好みや癖も知っておくにこしたことはないと思ったのだ。

そして、今や、賞の傾向と対策は頭にすっかり入っている。あとはテーマの熟成を待つだけな